

第196回 令和8年3月17日（火）

## 「トップダウンの怖さ」

3.11 からもう 15 年が経過しました。みなさんもリアルタイムで記憶している人は少ないのではないかと思います。その中でも大川小学校の悲劇は大規模な津波により学校にいた児童と教職員の多くが犠牲となり、震災による防災のあり方や責任問題に関して全国的な議論を呼びました。

全校児童は 108 人、職員は 13 人の学校でした。午後 2 時 46 分に地震が発生した後、教職員と児童は学校敷地内で待機していました。そのころ大川小学校の近くを流れる北上川の増水をはじめとした津波の危険が高まっていました。

地震発生後、児童たちは校庭で待機していましたが、その避難方針に関して「どこに避難すべきか」という判断に迷いが生じていました。少なくとも 40 分近く校庭で待機している間に津波が迫り、近くの避難高台ではなく、川沿いに避難を始めてしまうという判断が下されました。

避難場所として選ばれた道が津波の影響を受けやすい位置にあったため、避難中に高波に巻き込まれました。この結果、108 人の児童の約 70%にあたる 74 人と、教職員 10 人が犠牲となったとされています。生還した児童は 34 人でしたが、心の傷を負い続けたことが記録されています。

この日は校長が出張で、現場の最高責任者は教頭でした。電話は通じません。避難していた地元民の中には「いつも大丈夫だから津波など来るはずがない」と主張する人もおり、反対に生徒や教職員に一部は「危険だから裏山に逃げよう」と意見をしていたそうです。

「各自安全だと思ふところに逃げなさい」と指示すれば、多くの生徒は助かったかもしれませんが、これはいまだから言えることです。この方法で結果的に助かる生徒もいたかもしれませんが、亡くなる生徒も出た場合に責任を問われることは間違いありません。

日ごろから校長のトップダウンの体制があり、校長以外の人間が判断を下す訓練ができていなかったのかもしれないと書いてある本もあります。教頭先生もなくなってしまったので真相はわかりませんが、トップダウンが常態化している組織ほどリスク管理で指示待ちになりがちです。指示を守らなければいけないケースと、自己判断が優先されるケースがあります。

みなさんも学校にいるときと、登下校中では判断基準を変える必要があります。外出中も同様です。駅員さんや商業施設の係員の指示に従うときもありますが、そうではないときに自分の判断で動かなければならないことがあります。そのときは自分の生死を自分の責任で守る必要があります。

あわてず判断ができるのか、日常から考えておくことが大事です。